

高木復興大臣ぶら下がり会見録

(平成28年6月15日(水) 1650～1657 於) 岩手県遠野市)

1. 発言要旨

本日は岩手県宮古市、遠野市を訪問させていただきました。

宮古市では震災遺構として、この4月より一般公開を始めた「たろう観光ホテル」と「チーム漁火」として世界への販路開拓を行っている企業、また、遠野市では発災直後に後方支援の拠点としての役割を果たした防災センターを視察させていただきました。

「たろう観光ホテル」の学ぶ防災ツアーにつきましましては、関東や関西など遠方からも修学旅行など、この防災あるいはまた震災をしっかりと覚えておこうという、そういう思いを持った学生さんたちも来ているようでございまして、正に効果的な風化対策だというふうに感じました。

特に「たろう観光ホテル」の6階から見た海、そしてその横でちょうど社長が撮られたビデオを拝見したわけでありましてけれども、その場で見るからこそ、正に意義があるというふうに感じました。私もビデオを見ながら、そのビデオと対照して窓の外にある海を眺めながら、そこから津波が来てこんなことになったのかというのを本当に肌を感じました。思わず目頭が熱くなったわけでありましてけれども、ああいった形で震災遺構として残して、多くの方があの場所で海を見て、そしてビデオを見ていただくということが震災を風化させない将来への教訓となるというふうに思いますし、大変意義のある震災遺構だというふうに感じました。

また、「チーム漁火」につきましましては、若手の水産加工業者たちが、正にピンチだったわけでありましてけれども、それをチャンスに変えて新商品の開発、あるいは販路開拓を進めて地域の雇用にも大きく貢献をしていらっしゃると思いました。こうした取組もモデルとして復興庁でも販路開拓や輸出拡大をしっかりと支援して、地元的主力産業である水産加工業の復興を推進してまいりたいと考えています。

また、遠野市の防災センターにおきましては、改めて発災直後の後方支援の重要性を認識させていただきました。このような施設は後方支援の重要さというものの啓発材料として、また大震災のアーカイブとして震災の教訓を未来につなぐ貴重な存在だと考えております。今後も被災地に寄り添いながら現場主義に徹して、きめ細やかな対応を行って被災地復興の更なる加速化に向けて全力で取り組んでまいりたいと考えております。

私からは以上でございまして。

2. 質疑応答

(問) 2点お伺いします。

まず一つ、このように市長からいろいろ説明を受けられましたけれども、後方支援の資料がいろいろ残っている中で、改めて大臣、どう感じられましたか。

(答) 遠野の地理的なことがあるんだろうというふうに思いますけれども、この沿岸部で地震あるいはまた津波があったときに災害を後方支援するという、そういう思いを持ってずっと以前から準備を進めて訓練をなさってきたということで、その思いというものに心から敬意を表したいと思います。そうした常日ごろの思い、あるいは訓練というものが今回の東日本大震災で大いに役に立って、ここに多くの皆さん方、警察、自衛隊、消防、医療関係、多くの方がここに集まって、正に沿岸部の被災地を支援する、救援する、そして復興のために頑張る。本当に崇高な活動をしていただいたと思いますし、それがこの拠点がそういった役に立ったということを改めて認識をしました。ややもすると現場のことばかり私たちは気になるばかりでありますけれども、こうした後方支援という考え方、これは防災という意味において大変重要だという認識を持ちましたので、これからも後方支援という形の防災という意味において、復興庁として、あるいは国としてどういったことができるか、できることをまた支援できることがあればしていきたいというようなことも感じました。

(問) もう一点。遠野にはおおよそ3万人の市民がいます。代表して声を伺いたいんですが、改めて復興に向けてということで、遠野の皆さん頑張るといふ応援メッセージを、カメラにお願いします。

(答) 今、申し上げましたけれども、もちろん遠野市自身も震災で大きな被害を受けたわけでありましてけれども、それにめげず沿岸部の津波被災地域に対してしっかりと後方支援をしていただいた、あるいはまた、その基地としての機能を十分に果たしていただいた、これは正に皆様方の大きな思いというものがあったからこそでございまして、心から敬意とお礼を申し上げたいと存じます。復興庁といたしまして、あるいは国として、この後方支援という考え方、防災の観点からも非常に重要だというふうに思っておりますので、また国としての御支援できることがあれば是非やっていきたい、そんな思いを持ってきょうは遠野市を訪問させていただきました。是非今後ともしっかりと防災の意識を持って全国のモデルになるような、そういう地域にさせていただきたいと、そう願っているところでございます。

(問) 大臣としては、東北の観光について力を入れていらっしゃるかと

ということですが、きょう回られた「たろう観光ホテル」ですとか、「チーム漁火」の取組などはインバウンドも含めて日本全国を含めてのモデルというか、来訪いただける場所としては、どういうふうに思われましたか。

(答) インバウンドもさることながら、やはり「たろう観光ホテル」というのは震災遺構として、震災の教訓というものを将来に伝える、あるいは教育旅行という意味においても子供たちに防災の意識、日本は正に災害列島とっていいような状況でございませけれども、全国各地の子供たちがああいった遺構を見て、怖さというものも学んでいかなきゃなりませんし、それをどうやって防いでいくか、あるいはいざそういったときには被害をいかに小さくしていくか、そうしたこともこれからの日本国民、大事だと思いますので、そうした観光という意味においてもそうかもしれないけれども、そうした意味において非常に意義のある施設だというふうに思いましたし、水産加工業というのは観光といった面では、やはりおいしいものを食べるということは非常に観光、旅行にとっての魅力的なことです。そうした意味において水産加工業がしっかりとまた再生をして頑張っているということも観光にも役にも立つだろうというようなことを感じました。

(問) 復興庁としては、そういった地元で頑張っている取組を今後どう強力に後押ししていく考えですか。

(答) それはそれぞれ頑張っている方々によってパターンが違いますから、いずれにしてもその人たちに沿った形で、寄り添ってという表現をしておりますけれども、その人たちにとって必要な支援というものをきめ細やかにやっていくということが大事なんだろうというふうに思っております。

どうもありがとうございました。

(以 上)